

忘れ得ぬ人々

壬戌年夏 志

学校長 坂

松 男

◎私は昭和十年から十三年に、長浜農学校（現在の長浜農業高校）に学んだ生徒の一人でしたが、時の校長先生は関根良平先生でした。幼い頃から関根校長先生は、伊香農学校（現在の伊香高校）から来られたという事は知っておったが、今伊香高へ赴任して、会議室に掲げられてあるお写真を見、卒業生（教え子）の話を聞き、又手許にある伊香高校史を読んで初めて、先生の伊香高校での存在が、甚だ大きかったことを知ったのであります。先生は大正十年から昭和十年まで十三年間本校に在職され、県立伊香農学校の初代校長として、なみなみならぬご功績をたてられたのであります。

実は私は、先生の比較的短期間であった長浜農学校ご在職中三年間に、特に愛していただいた生徒の一人であったわけでありませう。お体は大きくはなかったが、豊かで上品なお顔、特に記憶力達者で博識、文章にたくみであり、音楽を好まれ、自ら作詩作曲されたことも時々とあつた。私は此の先生から有形無形の感化を受けたことは確かである。例えば人間は中広く豊かな教養を持たなければいけないこと、専門だけにとらわれず何か趣味を持ってとか、文書の書き方、或は勤勉でなければいけないこと等々。先生は神奈川県のご出身で、私の記憶に問

違いがなければ、農学校だけを卒業されて、上級の学校へは行かず、後は自学自習独学で検定・検定で資格をとつてこられたようで、倉の中で勉強したと言つておられた。時には十三時間飲まず食わずでブツ続けて、勉強したのがレコードだと言つて笑つておられた事があつた。昭和十三年夏、満洲（現在の中国東北地区）へ行かれ、戦後茨城県へ引揚げられた。

戦後一〜二回長浜へもこられ、久し振りにお会いした時には、たちどころに私の名前を呼ばれ、おまけに私の父の名前まで覚えておられたのには、改めて驚いたのであつた。しかし先生も晩年遅がけに二〜三年、総理府恩給局とかに囑託か何かで勤められたが、ちょっとしたはずみに転ばれたのがもとで、三十年代の終りか四十年代の初め頃に亡くなられた。私は先生の後へ四十年振り位に赴任したが、先生の高邁なご遺徳の片鱗でも身に体して、勤めることができれば、望外の幸であると考えて来た。

◎昭和十三年春二月、私は盛岡高等農林学校農学科（現在の岩手大学農学部）の入学試験を京都で受けた。今から四十三年前である。幸にも合格したが、その後同じく盛岡高農を受験し合格した、伊香農学校の民徳新治郎君（木之本町杉野の人）を知つた。彼は獣医学科であつた。もう遙かな昔のことと記憶も薄れ、どちらから連絡したのか忘れたが、一・二度手紙のやりとりの後、四月の始め二人は初めて会い、二人揃つて東北への長旅に出立したのである。今は亡き二人の父（新助、源左衛門）も米原駅頭まで送りに来てくれ、お互に手を振り合つて別れたことを今でも思い出す。当時は今とは違つて質素なものであり、又交通も不便であり、せいぜい急行位は乗つたかも知れないが、新幹線は勿論なく、特急等も思いもよらなかつた。東京經由約一昼夜の旅の後盛岡につき、先づ一年間は寮に入り学生生活が始まったのであるが、二年以後は下宿し、二人の下宿は程近い処にあり、学校で又下宿で時々と会つておつた。君は私のようなどちらかと言うと、ちょっとやんちゃな又幾分軽薄な人間とは違い、あくまで真面目で落着いており、何事にもコツコツと勉強し、本当に伊香人に相応しい人格の持主であつた。果せるかな成績も抜群によく、常に獣医学科の首席であつた。しかし天は二物を与えずと言うが、身体の方は余り丈夫でなく、どちらかと言うと弱々しい感じを受け、当時の私は決して頑健なと言うには程遠い体格であつたが、それでも此の点では私の方がまだ勝つておつた。

卒業後君は当時の優秀な獣医学生の多くがそうであつたように、馬匹の改良に志し、北海道にある農林省の日

高種馬牧場に勤めた。私は千葉市にあつた農林省の畜産試験場に勤務し、一年後満洲へ軍人として出征したのであり、その後戦争の苛烈化とともにお互に音信不通となり、私は戦後二十一年夏生命永らえて、大陸から帰還したのであるが、君にはもう再び会う事はできなかった。風聞によれば君は既に病魔のために不帰の客になつていた。

私は昭和五十三年、伊香高校へ赴任してから初めての正月に、杉野の民徳英雄様から賀状を戴いた。新治郎君の弟君だという。四十年振りに、旧友への懐しさがこみあげて来た。双方に一度お会いしたいと思ひながら日があつたが、五十五年夏機会あつて短時間ではあつたが、民徳様宅へお伺ひした。先づ仏壇のご法名にお参りをし、その後旧いアルバムをひもといて、家族の方々とはしばしば懐旧談に花が咲いたのであつた。

◎昭和十六年四月、かねて盛岡高農在学中に農林省畜産試験場の就職試験に合格していた私は、半ば不安に胸をおのかせながら千葉市にあるその役所に初めて出勤した。そしてそこで丹羽太左衛門様に会つた。丹羽様は余呉町上丹生のご出身で、私より五才上、伊香農出であり、又盛岡高農獣医学科卒である。かねてから丹羽様の名前は承つてはいたが、今日初めてお会いしたのである。中肉中背白哲の青年紳士である。

それから二・三日二人で連れだつて下宿探しをしてもらつた。幸に役所からそう遠くない処に手頃な下宿先が見付かり、そこに落ち着き毎日役所通いを始めた。その当時試験場内にも独身寮があり、実は丹羽様はその寮長であつたのである。しかし当時は丁度何れの部屋も先輩が入つており、ふさがつていたのである。尤もかなり後になつてから私も寮に入ることができ丹羽様の部屋になつた。

丹羽様は又伊香人の典型のような人であり、温厚篤実・刻苦勉励、土曜日以外は絶対外出をしない。その他の日も午後十二時までは絶対就寝しない。昼は役所で試験・研究に従事し、夜はその記録や計算・まとめ等で寸刻を惜しみ、営営として勉学に励まれた。その他の者も皆よく勉強したが、丹羽様に比較すれば物の数ではなかつた。特に私はもう既に一年後には軍隊に入り、出征することが決つていたし、かなり奔放な生活を続けていた。

丹羽様二十五才、私が二十才位であつた。一日土曜日の晩だつたと思うが、丹羽様の部屋に呼ばれて駄弁つたことがあつた。丹羽様はその頃既にオーストラリアとニュージーランドへ行つていた。その当時は外国へ行くような事は極めて稀であつたが、畜産試験場は時にオーストラリア・ニュージーランドへ綿羊の買付けに職員をやつ

ていたのである。私は現地から持つて帰られた丸のままのコーヒー豆を、小さな手廻しの粉碎機で粉にして、沸して下さつたコーヒーを、心から物珍しい気持ちで戴いたことを、今でも懐しく思い出している。当時はそれほど素朴な時代であつたのである。

昭和十七年三月初め私は試験場を退き満洲へ出征し、それ切り丹羽様とも会えなかつたが、戦後昭和二十六年七月頃だつたか、私が遅がけに勤めた長浜農高へ訪ねてこられて、十年振り位に再びお会いした。丹羽様もその後戦争に行つておられたのださうである。再会後しばらくたつた頃、丹羽様は農学博士の学位をとられた。昭和四十二年伊香高の体育館の竣工式には、講師として招かれ記念講演をやられた。この時も又私は丹羽様と会うことができた。その頃から丹羽様は長年勤められた農林省畜産試験場技師の職を退かれて、信州大学の教授となられ、又その後母校である岩手大学の教授となられ今日に及んでいる。ご専門は豚である。豚に関する学問にかけでは、既に世界的な権威者であり、事実いまだに世界各国に年一、二回位は出かけておられ、けだし伊香高八十年の歴史が生んだ逸材であることには間違いない。

長浜育ちの私は、伊香高校に赴任するまで、杉野や丹生には行つたことがなかつたが、尊敬する大先輩や追慕の気持ち捨てがたい亡友の、幼い日兎追ひ小鮒釣りし故郷の地に、特別な愛着の気持ちを持っていたが、星移りはからずも今日伊香高に赴任して、既に数回も現地を訪れ、あたかも自分の故郷に帰つたような気持ちになるのである。

五十五年十一月、丹羽様の永年の研究の功績が認められて、皇居で紫授褒賞を受けられた。私は早速川崎市のお宅へ電話をしてお祝いを申し上げました。丁度お留守中その時は、奥様とお話をしたのだが、その夜ご本人より電話がかかつて来た。何時もながら決して偉ぶらない、謙虚なお話振りである。稲の穂は稔れば稔る程頭を下げるたとえのように、誠に見上げたお人柄である。われわれ少しもあやかりたいものである。

丹羽様は昨年夏、あたら前途有為の身を病魔に罹され、惜しまれつつ逝去された本校旧教諭谷口俊孝先生の実の叔父様である。(昭和五十六年一月三十日)